

I 2017年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2017年度大学評価結果総評】

文学部通信教育課程は日本文学科、史学科、地理学科により構成されており、限られたリソースの中で学科ごとの特徴を活かし、教育の質を維持しながら課程の管理・運営が行なわれている点は高く評価できる。

今後、本課程が直面する課題に向けた具体的な施策が期待される。

また、文学部通信教育課程全体としての組織的な取り組みが見えづらいが、各学科には通信教育課程主任がおかれ、通信教育学務委員会や通教関連学科連絡会議なども組織化されているので、今後とも通教学科間の連携や調整等を密に行うことで学部全体の取り組みを一層明確化し、自己点検・評価シートにもそうした試みが反映されることを期待したい。

【2017年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

文学部の各学科（通学・通信教育両課程）は独自に理念・目的をもち、それにもとづき教育目標、各種方針を設定しているため、独立性が高い側面がある。しかし、近年は多様な教育課題に対応するため、十分な連携のもと、問題の共有化に努めている。2017年度には通信教育課程主任の主導のもと、3学科がともに3つのポリシーの見直しを行い、カリキュラムマップ、カリキュラムツリーの作成を行ったのは、その現れである。また、従来、学科ごとに分かれて作成していた自己点検・評価シートを、2018年度より学部一体で作成することも決定した。今後も3学科の連携をさらに強め、教育内容・方法等の向上を図ってゆきたい。

【2017年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

2017年度大学評価委員会による評価への文学部通信教育課程の対応状況については、従来からの取り組みに加えて、新たな取り組みも複数試みられている。たとえば、通信教育課程主任のもと、3学科がともに3つのポリシーの見直しを行い、カリキュラムマップ、カリキュラムツリーを作成した。また、学科ごとに作成されていた自己点検・評価シートを、2018年度より学部一体で作成する決定を行なったことは、学部としての統一性を高める上でも高く評価できる。それぞれの学科の努力とともに、3学科の連携を強めることで教育の質的維持と向上を目指し、いっそう組織的な展開を期待したい。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

【理念・目的】

文学部通信教育課程には日本文学科・史学科・地理学科の3学科が設置されており、文学部としての理念・目的の下でそれぞれの学科として通学課程（文学部）に準じた理念・目的を掲げるとともに、教育目標及び各種方針を定めている。

<日本文学科>

日本文学科は、その創設以来培ってきた「自由と進歩」という大学建学の精神を体現する学風を維持し、日本の文学・言語・芸能の歴史と現状についての先鋭で多様な研究を進めるとともに、その成果を生かして、法政大学の伝統を担う「進取の気象」をもつ人材を育成することによって、千数百年にわたって蓄積されてきた日本語と日本文化の豊かな遺産を世界と次世代へと受け継いでいくことを目的とする。

<史学科>

歴史学は史料（歴史資料）を集めて内容を解釈し、その史料分析を積み重ねて史実を捉え、その史実を体系化して歴史像を構築しようとする学問である。史学科（通信教育課程）では、史料に基づきながら歴史学の方法論を習得し、これによって過去から未来を理論的に見通せる思考力としての「歴史を見る眼」を持った人材を育成する。そのような「歴史を見る眼」は、歴史の中での自らの位置を客観的に見定め、次の一步をいかに踏み出すべきかを主体的に決断する力につながるものであり、「自由と進歩」「進取の気象」という法政大学の建学の精神を体現するかかる人材の育成を通して、史学科は広く社会に貢献していく。

<地理学科>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

欧米で「諸科学の母」と位置づけられる地理学は、現代ではまた、地球環境問題に深く関わる総合科学として高い評価を得ている。地理学が「旧くて新しい学問」と言われるゆえんである。

人間が生活の場としているこの地球表面付近において生起する自然的・人文的諸事象を時間的・空間的な分布現象として捉え、それらに対して周辺諸科学と関わりながら、科学的な視点からアプローチを試みるのが「地理学」である。

本学科では、この総合科学としての「地理学」の学習を通して、現代社会において今後とも一層その存在が期待される「地理学」的な物の見方・考え方やその素養を獲得することによって、多様な社会に貢献できる有能な人材を育成する。

【人材の育成に関する目的及びその他の教育研究上の目的】（教育目標）※通信教育部学則別表（7）

文学部通信教育課程では学部理念・目的の下でそれぞれの学科が明確な教育目標を定めている。

＜日本文学科＞

日本文学科は、その目的に基づいて、日本の文学・言語・芸能の歴史と現状を専門的に学び、国際化・情報化が進む21世紀社会において、自らの見解を自らの言葉で的確に発信できる人材の育成を教育目標としている。より具体的に言えば、以下のような資質・能力を備えた人材を育成することを目標とする。

1. 日本文学の作品世界のみならず、現代の様々な事象を繊細に感受できる豊かな感性
2. その感性によって感受した様々な事象について、論理的に分析・考察する能力
3. その分析・考察の結果を独自の世界や思想を構築することに結びつけられる創造性
4. それら一連の成果を社会に向かって魅力的に発信していく表現力

＜史学科＞

史学科（通信教育課程）では具体的な史料に基づいて歴史学の方法論を習得することによって、「歴史を見る眼」を持った社会人を育成すると同時に、歴史学への学問的関心を深めることを目標としている。歴史学研究の根本は、史料を活用した史実の解釈ないし体系化にあるが、こうした方法による史実の理解には、史料を博捜しその価値を判断する能力や、史料活用方法に対する学習および実践的な訓練が不可欠の課題となる。これらを総合的に学習することによって、現代社会、さらには未来への展望をも含めた人類史を、「歴史を見る眼」から判断することのできる人材を育成する。また、史学科における学習と実践的訓練の積み重ねが、さらに高度な専門的・自立的研究を進めるための基盤となるようにする。

＜地理学科＞

地理学科は、学科が提供するカリキュラムの下、以下に示すような人材を育成する。

1. 地理学の方法論を学ぶことによって地理学的視点から「地域の特性」を理解する能力をもった人材。
2. 地理学的見方・考え方から得られた「地域の特性」を自ら社会に発信する意欲をもった人材。
3. 目の前にある「社会的な問題」に対し、自ら率先して取り組み、解決する能力を持った人材。

①学部（学科）として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。 はい いいえ

②学部（学科）の理念・目的は大学の理念・目的を踏まえて設定されていますか。 はい いいえ

③理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。

（～400字程度まで）※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

学部・学科における理念・目的の適切性の検証は、教授会が通信教育学務委員会の審議を踏まえて実施を決定し、各学科の学科会議において実施し、その内容を教授会・通信教育学務委員会において承認するというプロセスをとることを原則としている。

なお、検証の時期については固定化されていない。

1.2 大学の理念・目的及び学部・研究科等の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

①学部（学科）の理念・目的は学則又はこれに準ずる規則等に明示していますか。 はい いいえ

②どのように理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。

（～400字程度まで）※具体的な周知・公表方法を記入。

学部および各学科の理念・目的は、法政大学ホームページにおいて公表している。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
----	---------

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・特になし。	
--------	--

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

文学部通信教育課程では大学や学部の理念・目的を踏まえ、3学科がそれぞれ理念・目的を設定しており、目指すべき方向性を明らかにしている。

理念・目的の検証は、教授会が通信教育学務委員会の審議を踏まえて実施を決定し、各学科の学科会議において実施し、その内容を教授会・通信教育学務委員会において承認するというプロセスを経て行われる。

理念・目的は学則に明示されており、法政大学ホームページにも掲げられることで教職員・学生および社会に対して公表・周知されている。

2 内部質保証

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証に関する活動は適切に行われていますか。	はい いいえ
-------------------------	--------

【2017年度の質保証に関する活動概要】※箇条書きで記入。

- ・通信教育課程の質保証に関する活動は、通学課程と共同で行っている。
- ・文学部質保証委員会の構成……各学科より委員1名が選出され、計6名で構成される。また、執行部（学部長・教授会主任・教授会副主任）がオブザーバーとして毎回、出席する。
- ・第1回：2017年4月26日。主な議題、①委員長の選出、②2017年度文学部質保証委員会の役割、③「自己点検・評価シート」チェックのスケジュールについて、④「自己点検・評価シート」のチェック体制・方法について、⑤「自己点検・評価シート」チェック後の振り返りについて。
- ・第2回：2017年5月31日。議題、①「自己点検・評価シート」チェック後の振り返り、②2018年度以降の自己点検・評価シートのあり方、③3つのポリシーへの指摘・改訂について。
- ・第3回：2017年12月6日。議題、①質保証委員会の今後の役割。
- ・第4回：2018年2月21日。議題、①自己点検・評価シートの年度末報告、②来年度の質保証委員会の委員の確認、③質保証委員会の今後の役割。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
2017年度は文学部質保証委員会の開催回数を4回とし（2016年度は2回）、自己点検・評価シートのチェックのあり方、今後の質保証の取り組みについて審議する機会を増やした。	2.1①

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

文学部通信教育課程の質保証に関する活動は、通学課程の質保証委員会と共同で行われており、教授会執行部同席のもと、文学部全体で問題の共有ならびに教育質保証の検討がなされ、一定の活動が行われている。

委員会開催回数は前年度の2回から2017年度は4回に増え、活動内容のさらなる充実が図られている。たとえば具体的には「自己点検・評価シート」への対応が審議され、3つのポリシーの改訂が執行部へ提言された。また質保証委員会の役割が継続的に検討されている点は、新たな展開が期待できる。引き続き客観的な視点から学部における諸対応のチェックを行い、大学評価委員会への対応案件のみならず、具体的かつ主体的な活動を行うことでPDCAサイクルの一層円滑な循環

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

が期待される。

3 教育課程・学習成果

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

【学位授与方針】

文学部通信教育課程では学部理念・目的の下でそれぞれの学科が明確な学位授与の方針（ディプロマポリシー）を定めている。

<日本文学科>

日本文学科は、建学の精神「自由と進歩」を体現する学風を維持し、日本の文学・言語・芸能の歴史と現状について専門的に学び、自らの見解を自らの言葉で的確に発信できる人材を育成するという教育目標を実現することを目指し、必要となる教育課程を編成する。その課程を修了した者に学士の学位が授与されるためには、以下の1～4の資質・能力を身につけていることが求められる。

1. 日本の文学・言語・芸能文化の歴史と現状についての基本的な知識
2. 自らの専門領域の基本文献を正確に把握することのできる読解力
3. 魅力ある研究対象を発見し、自らの力で調査・考究する思考力
4. 研究の成果を的確に伝えられる日本語の表現力

<史学科>

史学科（通信教育課程）における教育は、学生が卒業するまでに以下のような見識・能力を修得していることを目標とする。

1. 国際的な視野と、政治・経済・社会・文化などにわたる幅広い歴史知識を得ることによって、現代社会の問題を見る眼を養い、未来を展望する見識。
2. 史料の批判的考察から体系的理解に至る歴史学の分析方法を習得して思考力・判断力を培い、自主的・自立的に問題を発見・追究・検証する能力。
3. 通信学習による試験、レポート執筆、スクーリングによる対面授業、卒業論文指導等の訓練を通して、自分の意見を論理化・体系化して相手に伝え、かつ相手の意見を理解するコミュニケーション能力。
4. 文化遺産の調査・保存を啓発し、また、次世代の教育に歴史学の成果を生かすことのできる能力。

<地理学科>

地理学科は、地理学科のカリキュラムのもと所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の授与を認める。

1. 人間の生活の舞台である地球表層の自然環境や人文・社会環境について基礎的な知識を身に付け、地理的諸事象の基本的メカニズムを理解しているとともに、幅広い教養も身につけている。
2. 地理学的な思考力やものの見方を身に付け、それらに基づく研究方法を用いて考察することができる。
3. 地理学の知をもって社会の諸問題に関心を持ち、他者の声に耳を傾け、自分の考えを口頭表現や文章表現によつて的確に発信することができる能力、地域社会のニーズに応えられる能力、および諸問題を解決する能力を身につけている。

①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。

はい いいえ

3.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

【教育課程の編成・実施方針】

文学部通信教育課程では学部理念・目的の下でそれぞれの学科が明確な教育課程の編成・実施方針（カリキュラムポリシー）を定めている。

<日本文学科>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

日本文学科の教育課程は、他学部・他学科と共通の基礎科目と専門科目によって、構成され、特に日本文学科独自の専門科目において、その専門性を広く把握すると同時に深く追求するため、文学・言語・芸能文化の3コース制を（2013年度より）採用する。

文学コースでは、古代から近現代までの歴史的な見通しの中で日本文学について学び、さらに中国文学・沖縄文学なども視野に入れたうえで、特定の時代や特定の領域の文学を研究することを目指す。

言語コースでは、古典語の用法から現代日本語の変容までの広い領域で日本語について学び、方言・外国語と日本語の関係・理論言語学などの視点も理解した上で、特定の主題を通じて言語の本質を専門的に考察することを目指す。

芸能文化コースでは、各時代の芸能と、それらを育んできた歴史・宗教・文化について学び、日本の芸能文化の形成と展開を理解した上で、音楽・演劇や特定領域の日本文化に関して専門的に考察することを目指す。

3つのコースは必修科目と選択科目の組み合わせによって関係づけられており、学生は2・3年次以降いずれかのコースに籍を置いて学習を進める。4年次にはその研鑽の成果を発揮する卒業論文に取り組む。なお卒業論文は、日本文学科の教育課程における集大成と位置づけられる。

<史学科>

史学科（通信教育課程）のカリキュラムは、教育目標の達成をめざして、次のように体系的な構成を取っている。

1. 新入1年生に対して、学習の進め方やレポートの書き方に関する冊子を配付して、大学生としてふさわしい学習に適應できるよう指導する。
2. さらに1年生・2年生には幅広い歴史の勉強が必要であり、日本史・東洋史・西洋史それぞれに各時代別に概説の授業を設ける。
3. 2年生以降、歴史学の専門的教育に入る。専門的なテーマの講義を多数開講するとともに、学生は歴史資料学や演習科目の受講によって、専門的教育指導を受ける。
4. 4年生は教員の指導のもと、一つの研究課題に取り組み、卒業論文を作成する。卒業論文は学生の学業の集大成として位置づけられる。

<地理学科>

地理学科では、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 幅広い知識や教養を涵養するため、教養課程の単位を卒業所要単位に含めている。
2. 地理学科の専門科目は、1年次では入門的な科目、2年次以降は地理学の様々な分野の基礎的知識を身につけるため各論科目が配置されている。また、3年次以降において、スクーリング科目が加わり、地理学の方法論や研究法を身に付ける、演習や実習科目が配置されている。
3. フィールドワークを通じて地域の実態を調査し、その結果をもとにレポートを作成することによって、調査技能、研究方法および文章表現能力を身に付けさせる「現地研究」がスクーリング必修科目の一つとして配置されている。
4. 課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」をカリキュラムの集大成として位置づけている。

①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
【根拠資料】 ※冊子名称やホームページURL等。 ・教育目標 http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/mokuhyo/tsukyo.html ・学位授与方針 http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/gakui_juyo/tsukyo.html ・教育課程の編成・実施方針 http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/kyoiku_katei/tsukyo.html ・『史学科のしおり』（通教用学科手引き書）第3版、2014年	
③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性と連関性の検証プロセスを具体的に説明してください。	S <input type="checkbox"/> A <input checked="" type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
(～400字程度まで) ※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

学部・学科における教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証は、教授会が通信教育学務委員会の審議を踏まえて実施を決定し、各学科の学科会議において実施し、その内容を教授会・通信教育学務委員会において承認するというプロセスをとることを原則としている。

なお、検証の時期については固定化されていないが、2017年度については、2017年10月から12月にかけて実施した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・2017年度第6回・第8回文学部定例教授会議事録

3.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

初年次教育から専門的教育へと順次段階的に知識と理解を深めつつ、自ら問題を発見して、そこから研究課題を設定するとともに、課題について研究するための方法論を学ぶ。その過程において各教員は的確に学生の能力の向上を図り、その集大成としての卒業論文作成の指導に当たっている。文学部の通信教育課程3学科すべてが、学生の能力育成のための教育課程・教育内容を適切に提供している。

【日本文学科】

1年次から受講できるスクーリング科目として「論文作成基礎講座Ⅰ」と「論文作成基礎講座Ⅱ」を設置し、レポート執筆作法や文献検索法について、基礎的なレベルから学べるようにし、「自らの専門領域の基本文献を正確に把握できる読解力」「研究の成果を的確に伝えられる日本語の表現力」(ディプロマ・ポリシー)を実習形式で養成できる。文学・言語・芸能文化に関する専門性の高い科目については、時代と分野のバランスを考慮しつつ設置し、周辺領域科目についても「魅力ある研究対象を発見し、自ら研究する能力」(ディプロマ・ポリシー)の一助となるよう設置している。2013年度からの新カリキュラムは学科のカリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーに則り、再編成したもので、学生の能力育成に適した教育内容となっている。

【史学科】

ディプロマ・ポリシーをふまえたカリキュラム編成と履修方式を示し、またそれに対応する教員組織を備え、適切な教育課程および教育内容を提供している。具体的には必修科目として、1年次に「日本史概説」、2年次に「史学概論」「西洋史概説」「東洋史概説」を配置している。これは、専門科目に先んじてもしくは並行して、広く歴史学にアプローチできることを意図するものである。

教育課程・教育内容の適否および問題解決や改善策等について、必要があれば、毎月定例の学科会議において審議することとしている。

【地理学科】

地理学科のカリキュラム体系は通学課程を基本に設計されているが、学生の多様性という通信教育課程独特の性質に応じ、生涯学習を主たる目的とする学生に適した基本を身に付けるカリキュラムも構築している。生涯学習を主たる目的とする学生にも、また測量士補資格、中学校社会科及び高等学校地理歴史科・同公民科の教員免許等の資格取得をめざす学生にも配慮した科目配置となっている。なお2013年度からはカリキュラム改革を実施し、科目の学年配当変更、必修選択の設定等を行い、新たな学生ニーズに対応する教育内容を提供している。

【根拠資料】 ※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等

・『学習のしおり』

・カリキュラムツリー、カリキュラムマップは2018年度公開予定である。

②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。

S A B

(～600字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修(個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ(必修・選択等)含む)への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。

学部通信教育課程3学科では、それぞれに教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を年次配列に配慮しつつ、一般性と専門性の積み重ねをはかるべく、適切に開設している。よって、各学科の教育課程は体系的に編成されている。

【日本文学科】

2013年度から文学・言語・芸能文化の3コース制に再編成し、通学課程カリキュラムとの整合性を図りつつ体系的・専門的に学習できるよう整備したカリキュラムを実施している。「日本文芸学概論」「日本語学概論」「日本文芸史Ⅰ」を軸

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

にして、各コースの分野の基礎となる2科目を加えた5科目を必修として、専門教育を受けるための基礎作りとしている。さらに、専門性の高い時代別・分野別の「日本文芸研究特講」16科目を選択必修科目、「中国文芸史」「日本美術史」等、周辺領域の分野を選択科目として、4年次の卒業論文執筆に向けて、必要な知識・読解力・思考力を身につけられるよう考慮した科目が設けられている。

【史学科】

シラバスにおいて、教養科目（通信教育部共通の一般教育科目・外国語科目・保健体育科目。原則として1・2年次に履修する）と専門科目とを示し、専門科目では1年次に履修可能な科目と2年次以降に履修可能な科目とが明記されており、基礎的な科目と専門性の高い科目との区別を明瞭に示している。

専門科目においては、概説・概論系科目、講義系科目、特講系科目、演習系科目、実習系科目、卒業論文と、専門性に応じた段階的科目設定にするとともに、選択・選択必修・必修と3つに分類し、順次性とともな体系性が明瞭に読み取れるようにしている。

専門性の高い科目として演習をスクーリングで履修する場合には、基礎的な科目など一定の単位修得を要件とすることを示している。

最終的な卒業要件として卒業論文を定めており、科目学習の総仕上げとして位置付けている。

【地理学科】

教養科目と専門科目をシラバスで示し、1年次で履修可能な専門科目、2年次以降履修可能な専門科目とを明示している。専門科目においては自然地理学、人文地理学、地誌学の科目群を、必修・必修選択・選択の区分の中で配置している。スクーリングによる授業科目も適切に配置している。必修科目の「自然地理学概論(1)」、「人文地理学概論(1)」、「地理調査法(自然編)」「地理調査法(人文編)」は初学者が学ぶべき基礎的科目であり、1年次から配置している。それらを踏まえて各授業科目によって各分野の知識を幅広く習得し、それらを現場で体得するフィールドワーク、すなわち「現地研究」などを通して現場感覚を養う。それらを踏まえて、最終的に卒業論文に結実するよう各科目を配置している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『学習のしおり』『通信学習シラバス・設題総覧』

3.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。

【日本文学科】

- ・通信教育部ホームページ・『学習のしおり』『通信学習シラバス・設題総覧』『法政通信』を通じて、履修指導を行っている。
- ・学科独自の対応としては、日本文学科公式ブログに「新カリキュラム」についてというコーナーを設置して、2013年度から始まった新カリキュラムの意義や履修上の注意点等に関する説明を動画配信している (http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/?page_id=1848)。

【史学科】

- ・年度始めに、事務から学生に対して冊子『学習のしおり』が配布され、それによって履修方法が理解できるようにしている。さらに、シラバスには各科目の学習の到達目標・科目の概要・成績評価基準・テキスト名およびその詳細・学習指導の注意点等を示している。
- ・通信教育部全体の行事として年間2回行われる学習ガイダンスにおいて、専任教員が直接学生に対し履修の手引きを行い、また学生の疑問・質問に答えている。
- ・学生の履修上の疑問に対応する事務担当者からの連絡があれば、これを通信教育課程主任が学科会議において報告する、あるいは審議を発議することとなっている。
- ・履修指導に関連する問題などを、毎月定例の学科会議において審議することとしている。

【地理学科】

- ・履修指導、科目の概要については、通信教育部ホームページ、通信教育部の『学習のしおり』『通信学習シラバス・設題総覧』『法政通信』等の配布物で明示し、履修指導を行っている。
- ・スクーリングの各科目概要や到達目標、成績評価基準については『2017年度法政通信』『2017年度スクーリングシラバス』で明示している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『学習のしおり』『通信学習シラバス・設題総覧』『法政通信』
- ・ <https://www.tsukyo.hosei.ac.jp/support/learn-support/guidance/>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

【日本文学科】

学習指導については、『学習のしおり』『通信学習シラバス・設題総覧』『日本文学科のしおり』により行っている。それだけで不十分な点は、「論文作成基礎講座Ⅰ」と「論文作成基礎講座Ⅱ」の2科目をスクーリング科目として開講することで、対応している。対面形式授業のスクーリングは、7～8月と1月中旬～下旬に行う集中形式のもの、春学期と秋学期の夜間時間帯に開講されるもの、それから地方都市で年に2乃至3回開講されるものがある。また、地方在住者や社会人学生の利便のために、インターネット上で受講可能なメディア・スクーリングを開講し、近年その拡充に力を入れている。

【史学科】

通信教育部全体の行事として年間2回行われる学習ガイダンスにおいて、教員が直接学生に対し学習の手引きを行い、疑問・質問に答えている。

卒業論文については、はじめにガイダンスに相当する一般指導を実施したのち、年間3回指導の機会を設け、2回の文書指導と1回の面接指導を行っている。

対面授業であるスクーリングや大学構内における自習に際して、学生の求めに応じて、適宜面接指導を行うこととなっている。

単位修得状況が不良と判断され、在学年数が一定期間を経過した学生に対しては、履修計画書の提出指示などの改善指導を行っている。なお、学習上の不正行為など学生の本分に悖る行為に対する罰則規定は、学則あるいは不正行為処分基準において定められ、『学習のしおり』、『法政通信』において明示され、周知されている。

夏冬のスクーリングの際には、授業後にオフィス・アワーを設け、学生の相談に応じている。

通信教育部が主催する夏期・冬期両スクーリング期間中に行われる「通教生のつどい」という行事において、適宜、教員が学生の相談に応じている。

学習指導に関連する問題等を、毎月定例の学科会議において審議することとしている。

学生からの強い要望に応じて、インターネット上で受講できるメディア・スクーリング科目を2018年度から開講することとした。

【地理学科】

通信学習における疑問点は「学習質疑」制度によって対応している。2013年度からは通信教育部全体で年2回実施する「学習ガイダンス」に通教主任が出席し、疑問・質問に答えることを通して、新入学者・編入学者に対する学習の動機づけを行うようになった。またスクーリングは市ヶ谷キャンパスにおいて春・夏・秋・冬各期に実施し、地方スクーリングも実施している。対面授業によるスクーリング時においては、受講生からの直接の質問にも対応しており、その効果は大きい。「現地研究」においては2泊3日の行程で現場を歩くため、参加学生との質疑応答の機会が多い。さらに卒業論文作成においては一般指導、1次指導（文書指導）、2次指導（個別面談指導）、3次指導（文書指導）を実施し、段階をおった指導を実施している。

さらに、地方在住者や社会人学生の利便のために、インターネット上で受講可能なメディア・スクーリングを開講し、近年その拡充に力を入れている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『学習のしおり』『通信学習シラバス・設題総覧』『法政通信』
- ・<https://www.tsukyo.hosei.ac.jp/support/learn-support/guidance/>

③1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。

はい いいえ

【履修登録単位数の上限設定】 ※1年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位の上限を記入。

1年間に49単位（学期ごと、学年ごとの上限は設定されていない）。

【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】 ※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。

中学校・高等学校教育職員、司書、司書教諭及び社会教育主事を志望する者は、学部学科の専門教育科目の他にそれぞれ定められた授業科目の単位を修得しなければならない。上記に定める科目は49単位を超えて履修でき、この場合において、1年間に履修できる単位数の上限は、原則として60単位と定めている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「法政大学通信教育部学則」第4章 教育課程（年間履修単位の上限）第30条、（教職課程及び資格課程）第28条の2

④シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。

はい いいえ

【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：執行部（○○委員会）による全シラバスチェック等）。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> 通信教育課程主任（地理学科では学科内で選出されたシラバスチェック委員）によるシラバス第三者チェックの実施、および学科内・教授会への報告。 	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 <ul style="list-style-type: none"> 2017年度第7回教学改革委員会議事録、2017年度第8回文学部定例教授会議事録、同配付資料「2018年度シラバス第三者チェックの実施について（依頼）」 2017年度第9回教学改革委員会（拡大）議事録 	
⑤授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
【検証体制および方法】 ※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。 <ul style="list-style-type: none"> スクーリング科目については、「学生による授業改善アンケート」による確認を実施。 スクーリング科目については、教員個々において、リアクションペーパー等を通じて学生の理解にもとづく、授業の適切な進行を心がけている。 在学生アンケートの実施。 そのほか、学科における固有の取り組みは以下のとおりである。 【史学科】 <ul style="list-style-type: none"> 学科内の各専任教員は、割り当てられている複数の科目の科目担当として、それらの科目の実際の指導教員と適宜連絡を取り、毎月定例の学科会議において報告や問題提起を行うこととしており、またそれを受けて審議することとしている。 【地理学科】 <ul style="list-style-type: none"> スクーリング科目については、履修者に対して学科独自アンケートを実施して確認を行っている。 	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 <ul style="list-style-type: none"> https://ceportal.hosei.ac.jp/campusweb/top.do 	
3.5 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
【確認体制および方法】 ※箇条書きで記入。 【日本文学科】 <ul style="list-style-type: none"> 通信科目のテキスト学習は、添削指導と単位修得試験により、各教員がシラバスに従って、適切に成績評価と単位認定を行っており、専任教員が担当教員と連携して適切性を確認している。 スクーリング授業は、出席状況（春・秋スクーリングは二分の一以上、夏・冬スクーリングは三分の二以上の出席がないと単位の認定はなされない決まり）と筆記試験またはレポートの両面から、各教員がシラバスに従って、適切に成績評価と単位認定を行っている。 【史学科】 <ul style="list-style-type: none"> 全学共通の成績評価基準が学生および教員に周知されている。それに基づいて、各学生のGPAおよび単位修得状況を把握することができるようにしている。 学科内の各専任教員は、割り当てられている複数の科目の科目担当として、それらの科目の実際の指導教員と適宜連絡を取り、毎月定例の学科会議において報告や問題提起を行うこととしており、またそれに基づいて審議することとしている。 通信教育課程主任は、通信教育部事務部と連絡を取り、問題が発生すれば、直ちに学科会議に諮ることとしている。 卒業に際しては、該当学生全員の単位修得および成績の状況を示す資料を通信教育部事務部より受け取り、それを専任教員全員が点検することとしている。 【地理学科】 <ul style="list-style-type: none"> 卒業論文の成績評価は、地理学の教員全員で確認し、単位認定の適切性を確認している。 卒業に際しては、学生の単位修得、成績状況に関する資料を事務部から受け、地理学科の教員全員がそれを点検・確認している。 通信教育課程では成績確認申請は制度化されていないが、受講生から個別に申し出があった場合は、通教主任が窓口となって学科で議論し、対応している。 	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 <ul style="list-style-type: none"> 特になし。 	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
（～400字程度まで）※取り組み概要を記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

他大学等における既修得単位の認定は、通信教育課程全体の基準と学科カリキュラムに則して、各学科会議で精査したうえで、承認することとしている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ <https://www.tsukyo.hosei.ac.jp/admission/accreditations/>
- ・ <http://www.tsukyo.hosei.ac.jp/admission/outline/regular.html#cont02>

3.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。

はい いいえ

【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。

【日本文学科】

- ・進級などの状況については、事務課からの報告を受け、9月と年度末の学科会議で確認している。
- ・成績分布の実態に関しては、これまで十分に把握できているとは言えない。試験放棄者数については、通信科目やスクーリング科目により、登録方法・学習方法・基準等が異なり、試験放棄の定義づけも、単に登録と受験の差というだけにとどまらない難しい面があるため、現在までのところ、状況の把握は困難となっている。

【史学科】

- ・学生の学習の状況および成績（レポートや単位修得試験の成績評価を含む）については、割り当てられた複数の科目の担当として各専任教員が、適宜、実際の指導を担当する教員と連絡を取り、学科会議において報告、問題提起等を行うこととしている。
- ・全科目におけるレポート、スクーリング、さらに単位修得試験の成績分布について、学科として定期的に把握することはない。しかし、必要があれば、通信教育部事務部から関係資料を受け取り、それによって点検し把握できるようにしている。
- ・進級や卒業の状況、および卒業保留、退学、除籍の人数については、その都度、通信教育部事務部より通信教育課程主任を介して配布された資料によって、その状況を点検・確認し、把握し、さらに文学部教授会において報告することとしている。そのうえで、必要と認められた学習奨励策などについて、毎月定例の学科会議において審議することとしている。

【地理学科】

- ・進級・留級等のデータについては通信教育部事務からの報告を受けて学科内で確認している。
- ・成績分布の実態は把握できていない。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2017年度学科主任会議議事録、2017年度第5回文学部定例教授会議事録、同配付資料「2017年度 文学部卒業生数（9月）について（報告）」
- ・2017年度第11回文学部定例教授会議事録、同配付資料「2017年度 卒業生数（3月卒業）および進級・留級者数について（報告）」

②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。

S A B

(~400字程度まで) ※取り組みの概要を記入。

文学部では、各学科の専門分野における研究方法の習得と、それにとまなう課題発見・解決力、思考力、調査力、また、それらを説得力をもって発信するための文章力を有する学生に対し、学位を授与する方針をとっている。そのため、「卒業論文」を必修科目とし、論文に必要な要件を定め、その評価を通じ学習成果を測定している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『学習のしおり』

③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。

S A B

(~400字程度まで) ※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等）。

【日本文学科】

学習成果は、最終的には卒業論文の内容（卒論面接の内容も含む）・評価・提出者数によって測定している。日本文学科では、優秀な卒業論文は法政大学国文学会の機関誌『日本文学誌要』に、指導教員の推薦により掲載される。近年では2014年度に通教生の卒業論文をまとめ直したものが、一本掲載されたが、これは卒業論文の全体的なレベルアップの現れと考えられる。

【史学科】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

卒業論文については、卒業論文の面接試問が終わったのち、その状況・結果について、学科会議で報告することとしている。

優秀な卒業論文は法政大学史学会の機関誌『法政史学』に、指導教員の推薦により掲載される。

【地理学科】

学習の最終成果としての卒業論文作成にあたり、内容の一層の充実をはかるため文書・面接指導を実施している。2012年度からは新たに文書による3次指導を全員に課し、指導の充実をはかった。提出された卒業論文に対しては、主担当教員の評価を基本としながらも、公平を期すため複数の教員による面接試問を経て、地理学科の教員全員の合議によって最終的に成績評価されている。その結果は、最終的には教授会に諮られる。提出された卒業論文の質を高め、優秀論文が数多く提出されることこそが学習成果の測定に該当するものであり、卒業論文の成績は、地理学科の全教員によって確認されている。また優秀論文執筆学生には、例年3月に開催される全国地理学専攻学生「卒業論文発表大会」（日本地理教育学会主催）において、法政大学地理学科通信教育課程学生代表として発表するよう指導している。レベルの高い卒業論文である旨、他大学の教員から評価されることも多い。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『日本文学誌要』
- ・『法政史学』
- ・『新地理』（日本地理教育学会）
- ・『法政地理』（法政大学地理学会）

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

①方針の設定に関すること (3.1～3.2)

文学部通信教育課程の学位授与方針は修得すべき学習成果や、その達成のための諸要件が明示されている。学位を授与するために設定された教育課程の編成・実施方針も適切である。学部の理念・目的に基づいて定められた3学科の教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針はいずれもホームページなどに公表されている。

教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性や関連性の検証は、2017年10月から12月にかけて、通信教育学務委員会、関連3学科の学科会議、教授会などを経て慎重かつ適切に行われている。

②教育課程・教育内容に関すること (3.3)

文学部通信教育課程においては、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程と教育内容が適切に提供され、またカリキュラムの順次性や体系的性は確保されている。

各学科とも1年次の基礎的な教育から専門教育を経て、最終的には卒業論文が学びの成果、集大成となっている。今後は地理学科のように生涯教育を射程に入れるなど、通教生のニーズに合わせた課程・内容の構築が期待される。

③教育方法に関すること (3.4)

文学部通信教育課程では、いずれの学科においてもホームページ・『学習のしおり』・『通信学習シラバス・設題総覧』・『法政通信』・学習ガイダンスなどを通じて、学生の履修指導と学習指導を適切に行っている。

履修登録単位数の上限は、1年間に49単位と設定されている。ただし、中学校・高等学校の教育職員、司書、司書教諭および社会教育主事を志望する者は、それぞれに定められた授業科目につき49単位を超えて履修することができる。その場合でも、1年間に履修できる単位数の上限は原則として60単位と定められており、柔軟な履修を担保しながら同時に過剰な単位修得を防ぐ配慮がなされている。

シラバスの適切性については通信教育課程主任やシラバスチェック委員が確認し、検証を行っている。授業がシラバスに

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

沿って行われているかどうかは、スクーリング科目では「学生による授業改善アンケート」やリアクションペーパーによって個々の教員へのフィードバックが行われるものの、学部全体としての一定の方策は採られていない。地理学科ではスクーリング科目について学科独自のアンケートを実施し、史学科では専任教員と指導教員が適宜連絡を取って学科会議で情報共有するなど、肌理の細かい対応が行われているので、そうした取り組みが学部全体にも広がることが望まれる。

④学習成果・教育改善に関すること (3.5～3.6)

文学部通信教育課程では、テキスト学習・スクーリング授業いずれについても成績評価と単位認定の適切性が主として各教員によって確認されている。とくに地理学科では、受講生からの成績確認要請を受け付け、学科で議論し、対応を行っている。

他大学等における既修得単位は、通信教育課程に設けられた基準と学科カリキュラムに照らし、各学科会議において適切かつ公平に認定されている。

進級・留級などについては、事務課からのデータに基づき学科会議など学科内で確認されていることは適切であるが、成績分布については十分把握されているとは言い難いので、改善が求められる。

分野に応じた学生の学習成果は、主として卒業論文によって測定され、適切かつ公平に評価されている。通信教育の特性を活かしながら、同時に卒業論文以外の方法や取り組みも検討されることが望ましい。

4 学生の受け入れ

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

【学生の受け入れ方針】

文学部通信教育課程では学部の理念・目的の下でそれぞれの学科が明確な学生の受け入れ方針（アドミッションポリシー）を定めている。

<日本文学科>

日本文学科では、その目的に基づいた教育目標を達成するために、日本の文学・言語・芸能について関心をもつ者を広く受け入れる。ただし、通信教育課程においては、自宅で日本文学の専門的な学習ができるだけの国語の学力が不可欠である。その適性・能力等を見極めるために、書類審査を中心とする適切な入学選考を行う。加えて、通信教育課程が情報化の進む21世紀社会に対応して、生涯学習教育の担い手となっていることを考慮し、自宅学習を継続できる意志と主体的に学ぼうとする意欲も重要な選考基準とする。

<史学科>

史学科（通信教育課程）の入学受入れ方針は、その教育理念・目標に基づき、多様な資質・能力の可能性をもった学生の入学に期待をかけており、そのうえで歴史学的な思考方法の習得を目指す意志のある者を通信教育課程の入学者として認めている。また、編入学・転入学も認めており、さまざまな経路から学生を集めているが、それは学生相互に良い影響を及ぼしており、今後もこの方針を継続する予定である。

<地理学科>

地理学科は、書類審査を通して、以下に示すような能力・意欲等を有する者の入学を認める。

1. 高等学校で履修する国語、外国語、地理、歴史、公民、数学、理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要とされる基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 地理学科の専門分野に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

はい いいえ

4.2 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

はい いいえ

(～200字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

文学部通信教育課程 3 学科は、定員の超過・未充足について、入学者数および在籍者数が減少傾向にあることを認識・共有しており、カリキュラム改革や広報活動をするなど、各学科それぞれ以下のような努力を行っている。

【日本文学科】

定員の充足のあり方に関しては通信教育課程全体に関わる大きな問題である。日本文学科でも定員の未充足については、認識しており、問題点を明確化し、改革を進め、2013 年度から新カリキュラム（文学・言語・芸能文化のコース制・通学課程夜間時間帯授業を通信教育部生へ開放・スクーリングの拡充）を実施し、努力している。

【史学科】

入学定員の未充足状況について、また中途退学・除籍の問題については、社会人学生や生涯学習志向の中高年の学生が多いという通信教育部の特性から考えると、経済状況など社会のさまざまな影響が考えられ、学科としての努力にも限界があるという見方もある。しかし、教職員一体となって広報活動に努めている。たとえば、入学説明会における教員による講演や模擬授業を通じた魅力のアピール、広報媒体を通じた生涯学習の意義、在宅あるいは学内での自習の利便性のアピール、週末や連休を利用した連続 3 日間のスクーリングにおいて 1 科目・1 学期分の単位修得ができるという魅力のアピール、さらに卒業生の大学に対するメッセージのアピールなどの施策を取っている。

成績不良あるいは履修不良により一定年数を超えて在学する学生については、通信教育部事務局より配布された資料によって学科会議においてこれを把握し、当該学生に学習計画書を提出させるという措置を講じている。

【地理学科】

新規入学者数、在籍者数は長期にわたって減少傾向にある。地理学科単独での対応には限界があるが、通信教育部全体の対策とともに学科としての対応も検討していく。現行カリキュラムの問題点を再検討してカリキュラムの一層の充実をはかり、それを学外へ発信するよう今後とも試みていく。通信制教育の実施大学において、地理学科は本学以外に存在しないことを再発信する方法もまた、事務局とともに再検討する必要がある。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・『法政大学通信教育部入学案内』

4.3 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S A B

(～400 字程度) ※検証体制および検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

【日本文学科】

- ・学生募集および入学者選抜の結果については、学科会議で定期的に検証している。
- ・志望理由書の様式（設問や字数等）についても、学科会議で検討している。
- ・2013 年度から設けた課題図書リストの内容に関しても、随時検討を行っている。

【史学科】

- ・年度内に 7 回行われる通読判定と称される入学志願書の審査による合否判定作業は、専任教員が毎回持ち回りでこれを行い、そのつど判定結果・講評を学科会議において行うこととしている。その上で、問題や改善策等についても適宜審議することとしている。
- ・学務委員会における通信教育部全体の関係資料を学科において閲覧し、情報共有するようにしている。

【地理学科】

- ・入学志望書を通信教育主任が通読し、能力と意欲があるか否か判定している。
- ・通信教育主任が判定結果を学科会議で報告し、全教員で判定結果について確認・検証している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・通信教育学務委員会資料

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし。	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【この基準の大学評価】

文学部通信教育課程においては、アドミッションポリシー（学生受け入れ方針）に、求める学生像や修得しておくべき知識等の内容や水準が明示され、その方針設定は適切である。

定員の未充足が恒常的な問題となっているが、その対応としては、広報活動に努めながらカリキュラムやスクーリングの充実・拡大をはかるなどしており、その努力は評価できる。しかしながら数年前から同様の努力を続けても状況は好転していないので、さらなる分析と検討を行い、効率的かつ具体的な取り組みを新たに講じる必要があろう。

学生募集・選抜制度・選抜体制は適切であり、学科会議などで定期的に検証が行われ、選抜も学科ごとに厳正・公平に実施されている。

5 教員・教員組織

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

①組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在をどのように明示していますか。

【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※簡条書きで記入。

- ・文学部として、通信教育部を有する日本文学科、史学科、地理学科の3学科を通教関連3学科と総称し、その各学科の通信教育課程主任は、通信教育部が主催する毎月定例の学務委員会の構成員として通信教育部全体に関わる事項を審議し、所属する各学科において、および文学部執行部との連絡・調整にあたることとなっている。さらに、文学部執行部が主催する通教関連学科連絡会議、学科主任会議、さらに拡大教学改革委員会における通学課程との共通議題にいずれも出席し、審議する一員となっており、また所属学科との連絡・調整を担当している。
- ・文学部教授会においては、通教関連議題について、上記3学科の通信教育課程主任の代表1名が通年で、発議・説明・報告等を担当している。代表1名は、1年ごとの担当学科交代制による。さらに、3学科それぞれの発議、説明、報告等については、各通信教育課程主任がこれを担当している。
- ・上記3学科においては、各通信教育課程主任が、通信教育部事務部と所属学科あるいは他学科および学部執行部との連絡・調整を担当している。

【明示方法】※簡条書きで記入。

- ・「法政大学通信教育学部学則」「通信教育学務委員会規程」において明示。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・「法政大学通信教育学部学則」「通信教育学務委員会規程」

5.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。

はい いいえ

(～400字程度まで) ※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性の観点から教員組織の概要を記入。

文学部通信教育課程では、学位授与方針、カリキュラムを前提とした教員像、教員組織の編制方針を明らかにしている。関連3学科それぞれが通教主任を配置し、通教学務委員会および各学科会議の場で話し合い、教育課程に相応しい教員組織の整備に努めている。

【日本文学科】

2013年度から、それ以前の文学・言語の分野を中心にしたカリキュラムに芸能文化の分野を新たに加えたカリキュラムになった。これは在籍教員の研究分野を十分に考慮した上での変更ということもあり、新カリキュラム運営においても相応しい教員組織となっている。さらに、2014年度0.5枠増の人事（文学コース担当）を実現でき、指導分野を拡充させた。そして、文学12名・言語2名・芸能文化2名の専任教員に加え、高い専門性を有する兼任教員の協力を得ることで、適切な体制でもって教育にあたっている。

【史学科】

日本史・東洋史・西洋史の3分野において原始・古代から近現代史まで、また地域史あるいは地域間交流、さらに政治・経済・文化といった領域など、分野・時代・地域・領域を幅広くカバーするように努めている。学生の多様な学びの志向を想定し、専任教員のみでは対応困難なものにおいては、大学および学部、学科において定められた人事上の手続きを経て、適切な兼任（非常勤）講師を採用して対応するようにし、カリキュラムと教員組織との整合性に努めている。

【地理学科】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

総合科目としての地理学の領域を担当できるよう、自然地理学、人文地理学それぞれの専門分野のバランスに留意した教員組織になっており、また優秀な人材を内外から兼担・兼任教員として確保している。したがってカリキュラムに則った教員組織が整備されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『学習のしおり』『通信学習シラバス・設題総覧』

2017年度専任教員数一覧

(2017年5月1日現在)

学部・学科	教授	准教授	講師	助教	合計
文	20	7	2	2	31

※学校基本調査の教員数を記載。実際の所属教員数とは一致しない場合あり。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

文学部通信教育課程の日本文学科・史学科・地理学科それぞれにおかれている通信教育課程主任は毎月定例の全学学務委員会に出席し、通信教育にかかわる事項を審議する。通信教育課程の議題は学部内では通教関連学科連絡会議、学科主任会議、拡大教学改革委員会で適切に審議され、教員間の役割分担や責任の所在は明白である。これらは「法政大学通信教育部学則」ならびに「通信教育学務委員会規程」に明示されている。

また教員組織は専任教員と兼任・兼任教員が補完しあいながら、大学・学部・学科が定める教員像や教員組織の編制方針、カリキュラムとも整合性が取れており、専門分野のバランスに留意した適切な体制で教育が展開されている。

6 学生支援

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。 はい いいえ

【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。

・卒業・卒業保留・留年者・休・退学者の状況については、通信教育部事務局より通信教育課程主任を介して配布された資料によって学科会議において点検、確認の作業と承認の決定を行うこととしている。その後年度末あるいは毎月の文学部教授会において、点検、確認、承認の報告を行うこととしている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2017年度第1回～第11回文学部定例教授会議事録

②学部（学科）として学生の生活相談に組織的に対応していますか。 S A B

(～400字程度まで) ※学生の生活相談に関する取り組み概要を記入。

主に各学科の通信教育課程主任が、学生の生活相談を受け付け、必要な助言を与えるほか、学内の関連部局と連携して課題の解決に当たっている。各学科では必要に応じて学科会議で課題の共有を図り、解決に向けて協力している。また、障がい、LGBTなどに関わる課題については、執行部も関与し、学内内部局との調整を図り、対応を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

文学部通信教育課程の卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況は、通信教育部事務局より通信教育課程主任を介して学科に配布される資料によって把握されている。その後、学科会議の議を経て年度末あるいは毎月の文学部教授会において報告される。

学生の生活相談は、各学科の通信教育課程主任が受け付け、学内の関連部局と連携して問題解決に当たり、適宜学科会議で課題の共有が図られ、また課題によっては執行部が学内部局との調整を図るなど、組織的に対応されている。

7 教育研究等環境

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

7.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。	
①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフなどの教育研究支援体制はどのようになっていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
(～400字程度まで) ※教育支援体制の概要を記入。 ・実習系の科目においてTAを配置している。2017年度の専門科目における実績は以下のとおりである。 地理学科6科目 ・地理学科主催科目「現地研究」(2科目)においては、現地研究補助員を配置している。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし。	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

文学部通信教育課程では、実習系の科目、具体的には2017年度の地理学科6科目においてTAが配置され、地理学科主催科目「現地研究」(2科目)において現地研究補助員が配置された。

8 社会連携・社会貢献

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

8.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。	
①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

文学部（通学課程）自己点検・評価シート参照。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

文学部通信教育課程では、多くの教員が多様な分野で社会連携・社会貢献に関する活発な取り組みを行っており、複数回にわたる継続的な活動も見受けられる。しかしながら通信教育課程独自の教育・研究の推進に資する取り組みや社会貢献活動は行われていない。社会的なニーズが高まっている生涯教育の観点からも、より積極的な活動が期待される。

9 大学運営・財務

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

9.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の役職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

①通信教育課程主任をはじめとする所要の職を置き、また通信教育学務委員会等の組織を設け、これらの権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。

はい いいえ

(～200字程度まで) ※概要を記入。

「法政大学通信教育部学則」「通信教育学務委員会規程」にしたがって、通信教育課程主任を置き、通信教育学務委員会を設置して、権限や責任を明確化するとともに、規程に則った運営を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「法政大学通信教育部学則」「通信教育学務委員会規程」

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし。	

【この基準の大学評価】

「法政大学通信教育部学則」「通信教育学務委員会規程」にしたがって通信教育課程主任がおかれ、通信教育学務委員会が設置されるなど、権限や責任は明確で、規則に沿った運営が行われていると評価できる。

III 2018年度中期・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリキュラムのあり方についても検討する。
	年度目標	各学科において、カリキュラム、教育内容について検証し、必要に応じて改編を行う。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	達成指標	カリキュラム、教育内容を検証するための学科会議を開催する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	学生の主体的な学びをさらに実現するための方策を積極的に導入する。特に、スクーリング科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業等のさらなる導入を図る。
	年度目標	100分授業の実施にともない、スクーリング科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業の有効な導入事例に関する情報を共有する。
	達成指標	教授会において研修会を開催する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	学習成果の多様で、効果的な測定方法の導入を検討する。特に、卒業論文以外の科目における学習成果の測定方法について検討を深め、点検・評価活動へ活用する。
	年度目標	学習ポートフォリオ、学生アンケート、ルーブリック等の導入事例に関する情報を共有する。
	達成指標	教授会において研修会を開催する。
No	評価基準	学生の受け入れ
4	中期目標	各学科が定めるアドミッション・ポリシーを体現する現行の入試制度を維持するとともに、その発展をめざし、検証と見直しを進める。
	年度目標	専門分野に対する関心と、大学での学修に意欲をもつ学生をより適切に受け入れるために、出願時に提出を求める「志願書2」の課題設定の検証を行い、必要に応じて修正を施す。
	達成指標	学科会議において左記の検証・審議を行う。
No	評価基準	教員・教員組織
5	中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。
	年度目標	年齢、国際性等の観点で教員組織の現状を検証し、さらなる多様性の追求を図る。
	達成指標	人事委員会において左記を検証し、各学科の新規採用人事に向けた情報を提供する。
No	評価基準	学生支援
6	中期目標	卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況をこれまでどおり適切に把握したうえで、卒業保留・留年、休・退学の減少に向けた課題を精査し、教育上の取り組みに反映させる。
	年度目標	卒業保留・留年、休・退学者の背景を調査し、より学修しやすい環境を整えるための方策について検討する。
	達成指標	学科会議において左記を検討し、実現可能な対応策を策定する。
No	評価基準	社会貢献・社会連携
7	中期目標	社会人の学び直しの動向を受け、いま以上に社会人の学修の機会を提供するよう努める。
	年度目標	通学課程と協働し、社会人向けプログラム、履修証明プログラム等の諸制度について検討を行う。
	達成指標	学科会議および教学改革委員会において、社会人向けプログラム、履修証明プログラム等の諸制度について検討を行う際、通信教育課程の活用についても検討する。
【重点目標】 【年度目標】100分授業の実施にともない、スクーリング科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業の有効な導入事例に関する情報を共有する。 【施策】2018年度第5回教授会において、有効な取り組みを実践している教員を講師としたワークショップを実施する。		

【2018年度中期・年度目標の大学評価】

各評価基準において文学部通信教育課程の目標はいずれも適切かつ具体的である。特に今後の教育形態としてアクティブラーニングや双方向型授業、学習ポートフォリオやルーブリックの活用を視野に入れるとともに、「志願書2」における課題設定の検証を行うなど、きわめて積極的かつ能動的な目標設定となっており、高く評価できる。2018年度の達成指標は研修会やワークショップの開催や情報共有、ならびに検討事項が多いが、今後の踏み込んだ改善につながる事が期待される。

【大学評価総評】

文学部通信教育課程は、個々の学生の興味・関心に応える教育組織として意欲的な目標を設定し、それらを実現するた

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

めにさまざまな企画・立案がなされていることは高く評価できる。各学科とも大学教育の質を維持しながらそれぞれの目的に沿って合理的に運営されているが、相互に連携しながら全体としての統合には継続的な努力が望まれる。また人文科学系の学問的普遍性を維持しつつ社会環境の変化を的確に把握し、スクーリングやメディアスクーリングの機会をとらえて新たな学びの形態が導入されることは、学生の減少に対しても一定の歯止めとなるだろう。学部併設の強みを生かし、限られたリソースの中で効率的・合理的な改革が展開されることを期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。